

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

現代社会の発展過程における少数民族文化保護・伝承を担う時代の責任と義務：
中国「広西民族生態博物館建設
1+10プロジェクト」の実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 覃, 溥 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008862

現代社会の発展過程における少数民族文化保護・ 伝承を担う時代の責任と義務

— 中国「広西民族生態博物館建設1+10プロジェクト」の実践 —

覃 溥
訳：長沼さやか

- 1 中国広西の民族文化と文化遺産保護の状況
 - 1.1 多様性と多彩さ
 - 1.2 独自性と稀少性
 - 1.3 伝統性と完全性
 - 1.4 浸透性と包括性
 - 1.5 調和性と生態性
- 2 広西政府の民族生態博物館建設に関する思考と探究
 - 2.1 専門的な指導を首尾一貫して行う
 - 2.2 試行地区プロジェクトの選択の基点の把握と各級の共通認識の達成
 - 2.3 学習型の実験
 - 2.4 村民に生態博物館の主としての意識を強化させる
 - 2.5 中国政府による「保護を主体とし、救済を第一とする：合理的な利用と管理の強化」という文物工作の方針を生態博物館建設にも適用する
 - 2.6 生態博物館の建設と広西民族博物館の関係方式を政府が実施する民族の伝統文化とその他の文化遺産の保護、研究、伝承、展示工作の任務をになう連合体とする
- 3 広西民族生態博物館建設の「1+10プロジェクト」
 - 3.1 広西南丹県里湖の白褲ヤオ生態博物館
 - 3.2 三江県トン族生態博物館
 - 3.3 百色市靖西県の旧州チワン族生態博物館
 - 3.4 桂北霊川県霊田郷の長崗嶺村漢族生態博物館
 - 3.5 桂北龍勝県の龍脊チワン族生態博物館
 - 3.6 桂東賀州市蓮塘鎮の客家囲屋生態博物館
 - 3.7 桂西那坡県達文の黒衣チワン族生態博物館
 - 3.8 融水ミャオ族自治県の安太ミャオ族生態博物館
 - 3.9 桂南東興市のキン族三島生態博物館
 - 3.10 桂中金秀ヤオ族自治県のヤオ族生態博物館
- 4 評価と問題

我われがその存在を見たくないと思っても、世界では毎日のように衝突が起こっている。衝突は各種文明の間、伝統と現代の間において、異なる内容と方式で発生し、さらにはその異なる結果によって世界の発展に影響を及ぼしている。なかでも、日に日に劣勢となってきた少数民族文化にとって、衝突の影響が及ぶ範囲は歴史にも前例がない。複雑かつ高速に変化する時代の大きな背景のもと、わずかに注がれる関心のみでは、もはや遠く及ばない状況にある。中国における経済のグローバル化や、国際的な範囲に

おける経済自由貿易区の形成がもたらした距離の短縮と交流頻度の増加、郷鎮の都市化建設の加速と推進、文化多様性と多元化の保存と持続は、いまだかつてないほど緊迫した、民族の命運に関わる重大な社会問題にもなっている。歴史的な事実は、民族精神や故郷を見守ろうとする心を放棄した国家と民族の衰退、甚だしい場合には消滅が必至であることを証明している。文化の多元性とその保護と伝承は、人類の生存・発展や国家と民族のアイデンティティに関わるものである。それは人びとの環境や資源に対する保護が人類の存亡に関わるのと同様、世界中の心ある人びとにその心身を投じるよう呼びかけて行動に移す使命を帯びている。

1 中国広西の民族文化と文化遺物保護の状況

広西は、多くの民族が集住する辺縁地域の1つであり、チワン（壮）、ヤオ（瑶）、ミャオ（苗）、トン（侗）、スイ（水）、ムーラオ（仫佬）、コーラオ（仫佬）、イ（彝）、マオナン（毛南）、キン（京）、回族の11の少数民族、合わせて約1800万人以上の人びとが暮らしている。歴史上において、たとえば古代陝西文化、越文化、滇文化、楚文化、中原漢文化のような各種の古い文化、ならびに各民族の伝統文化、はては千年以上も前に「海のシルクロード」を伝ってやってきた「洋」文化などが、みなこの地域に共存し、相互に影響と交流・融合をしながら、深厚で豊富な広西民族伝統文化を造り上げ、今日、我われが眼にする特色のある民族文化生態を残してきた。

建国以来、広西政府は自治区全域において、三度にわたる大規模な文化遺産調査を行ってきた。とくに1980年代初期の全国的な文物調査と、2000年代に2年にわたって行われた古民家建築群と少数民族建築群の保護状況に関する調査では、合わせて1万カ所を超える一定の価値を有する各時代の移動不可能な保護地点が登録された。そのなかには、明確な民族の特徴をもった保護地点が4000カ所以上あり、総数の半分を占めるに及んだ。しかし、いまだ登録されていない古民家や古い街並みや村落もまた400カ所以上あり、広西各地に分布している——これらは、古くは明清時代、新しくは民国時代の建築構造とスタイルを完全に保存しているだけでなく、多くの古い民俗と伝統的な技芸を引き継いできており、非常に高い歴史、科学、芸術的価値を有している。このほか、広西では100カ所以上の文博機関において、これまでに出土したものや、後世に伝えられてきたものなど、27万点以上の文物や芸術品を所蔵している。少数民族の民間で千年もの間伝承され、現在も使用されている銅鼓およびその他の民族器具、各民族の間に残されている言語、神話、叙事詩、音楽、舞踏、戯曲、曲芸、切り絵、絵画、彫刻、刺繍、染物などの各種文化、芸術、技芸、および各種の儀礼、年中行事、民族競技活動など、豊かな無形文化遺産は、その強い生命力によって今日の広西文化の伝承と発展に影響を与えている。

1.1 多様性と多彩さ

広西の歴史は長く、土地の面積は広く、民族は多く、異なる民族、異なる支系、異なる地域には、異なる文化の形式と内容があり、民族文化は多様かつ多彩である。たとえば民家建築のように、漢族の中庭式の民家、園林式の山荘、客家の囲屋、少数民族の高床式建築、南洋スタイルの騎樓などがある。民族衣装については、広西に住む12の民族はみな、それぞれの伝統的服飾を有している。同じ民族でも支系が異なれば、やはりそれぞれに異なった服飾がある。なかでもヤオ族は異なるスタイルの服飾が20種類以上も存在し、その典型である。

1.2 独自性と稀少性

異なる民族は異なる文化を有しており、広西の民族文化が独特、かつ稀有であることは目に見えて明らかである。たとえば、戦国から後漢にかけて、チワン族の祖先である駱越人がおこなっていた巫術活動がとどめられている左江岩画は、左江沿岸の200kmに渡って延々と分布している。そのなかでも典型的である寧明の花山岩画は、幅が172mに達し、面積は8000㎡以上、描かれている人物は1900以上である。人物のうち最も大きなものは3m、最も小さなものは0.3mであるが、他に動物や器具も少し描かれている。規模が大きく、情景は壮観で、内容もたいへん豊富であり、その歴史、芸術、科学、民族研究上の価値は、稀少なものとして賛嘆されている。

また、広西の銅鼓文化は独自の特色を有しているだけでなく、第一に起源が古い。古い銅鼓とこれに関連する習俗は、今日に至っても依然として、多くの少数民族地区で使用され（民間で收藏されているのはわずかに1500面となっている）流行しており、重厚で深遠な銅鼓の音色は千年の時空を超えて、現在も絶えることはない。古い銅鼓文化は、万人がその神秘を探ろうとする生きた化石となっている。第二に、種類がそろっており、数が最も多い。広西は現在のところ、春秋戦国から明清にかけての各時代、各タイプの銅鼓を2000面以上も保存しており、世界一を誇る。第三に、大きさが巨大で、鑄造が精巧であり、逸品が多い。たとえば、北流県で出土した雲霄紋大銅鼓は、鼓面の直径が165cm、重さが300kg以上ある。これまで世界で知られてきたなかでは大きさ、重さともに最大の銅鼓で、「銅鼓の王」と讃えられている。貴港澳墓で出土した「割船羽人舞踏紋」銅鼓や、桂平県の「牛拉槓変形羽人紋」銅鼓も、華麗で優美な造型で、図案ははっきりとしていて多彩であり、立体的な彫刻は多様であるうえに生活の息吹にあふれている。いずれも世にも珍しい貴重な逸品である。

1.3 伝統性と完全性

広西は祖国の辺縁に位置し、経済発達が遅れた地域に属するうえに、多くの民族が集住する比較的辺鄙な地域であるため、多くの伝統文化が系統的かつ完全に保存されてき

ている。たとえばトン族の民家建築・工芸、チワン・トン・ヤオ・ミャオ各民族の紡織、染物、刺繍、金属加工、服飾技芸、多くの民族の年中行事、歌謡、技芸などもみな、比較的完全な形で伝承されてきている。

1.4 浸透性と包括性

広西の各民族の分布は、「大分散、小集居」という特徴がある。各民族は長期にわたって接触・交流をくりかえし、それぞれの文化は一方で独特な伝統を有しながらも、他方では互いに浸透・融合してきた。桂北の農村のチワン族、漢族、トン族、ミャオ族の高床式の木造建築や、建築資材、建築構造、工芸や装飾はみなだいたい同じであるが、これはその典型的な例である。このほか、祝賀行事や食文化、娯楽などにおいても、各民族はみな、類似した習俗、または共通した習俗を数多く有している。

1.5 調和性と生態性

広西の各民族は長い間、この地に発祥し、発展してきた。この地の水土が育てた人民がこの地の文化を育ててきており、民族文化は、自然に調和した光景を呈している。トン族が住む山地の村落・鼓楼・風雨橋は、緑の山々・田野・河流と調和した美しさを呈している。高山峻嶺にあるヤオ族の村は森林の間で互いを引き立てあい、もとの地形と植生が非常によく保存されており、白褲ヤオの「物我合一」の哲学理念をよく表している。まさに、このような人文・自然環境において（調和的、生態的文化環境は、民族文化の保存のための重要な条件であり、また少数民族文化のとりわけ突出した点でもある）、民族の伝統文化は長きにわたって完全な形で保存され、持続されてきたのであり、各種の伝統文化と相互に依存しながら、綿々と伝承されてきたのである。

広西の民族文化の起源が長く、民族文化の生態が多種多様で壮観であることは各民族の人びとに華々しい文化成就と文化遺産をもたらした。しかし、中国の現代化の加速と市場経済の広がり・発展にともない、昔は相対的には世間から隔てられていた民族地区も外来文化による不断の衝撃に直面するようになり、衝突と融合の激化と加速化を生んだ。新たな生活スタイルは人びとの衣食住や行動を変え、外来文化の流入とファストフード文化は文化消費市場を急速に占領し、科学技術の日進月歩の発展と急速な知識の更新は、伝統や民族文化に対する衝撃を生み出し、まさにこの最後の「浄土」にも襲来した。稀少な民族文化遺産（とくに、民族の民間言語や芸術、民間工芸美術、民間風俗儀礼、祝賀行事などの無形文化遺産）は、消滅の重大な危機に面している。この危機に際して中国広西政府は鋭敏な意識と、辞退しがたい責任感をもって、さらなる具体的な措置と行動により、この方面における職能と義務を強化したのである。

2 広西政府の民族生態博物館建設に関する思考と探究

20世紀後半、貴州省政府は中国生態博物館建設の先駆者として、欧米の生態博物館の理念を中国少数民族文化の保護と伝承に用いた。1998年より我われは、隣省がおこなってきたこの偉大な文化プロジェクトの伸展を注視しながら、ヨーロッパに起源をもつこの新たな博物館の理念への接触を開始し、広西における生態博物館建設の問題を、広西文化遺産保護「十・五計画」に組み入れ、いかにして広西の文化遺産保護事業の具体的な実践に生態博物館のモデルを運用してゆくかについての検討と研究をはじめた。2001年、我われは広西において関連する政府や文化関係の官員で構成された視察団を組織して貴州省を訪問し、六枝特区の50数km北にある山深くに建設された、中国で最初の生態博物館——梭嘎郷隴戛寨ミャオ族生態博物館を参観した。貴州省の計画・場所の選定・事業の始動・組織と具体的な実施など、長年にわたる建設に関する思考の道筋や状況についての説明を聴いてゆく中で、我われは、ミャオ族村内に建てられ、すでに対外的に開放された資料センターと生態博物館の文化模範家庭を詳細に視察し、ミャオ族の村民と談話し、彼らの生態博物館の重要な構成部分としての体験と実直な情熱を体感した。この視察で我われは、中国的な特色のもとでの生態博物館建設の選択と実験の可能性、および将来的な見通しを目にすることができた。また、我われは長時間かけて険しい山道を往復するなかで、隴戛寨ミャオ族生態博物館建設の困難な環境と、任務は重要だが道のりは遠いという状況において、この選択をすることの意味に深く思い当たった。生態博物館の建設は尻込みや放棄ができない選択であり、伝統的な意味での博物館の建設とは異なり、あまりに多くの内容と従来にはなかった機能を付与されている。そのため、その後の2年余りの時間において我われは、熟考し、各分野の意見を聞き、さらに深く広西の資源とさまざまな条件の考察と分析を繰り返し、実情に見合った方案を研究してきた。「中国の特色」があり、広西の実情にも合う生態博物館の建設モデルを全力で追求し、そのことを通じて伝統的な民族文化の保護の緊迫した局面に有効な方法で対応しようとした。

中国における生態博物館の広まりは、中国の現代化建設のもと、悠久の歴史文化を保護し、光り輝く民族伝統文化を伝承してゆくうえで必至であり、中国少数民族政策および、一部の少数民族地域の社会と文化の発展のためにも必要なものである。現代化における工業の発展や、自然資源に対する急速な開発、それによってもたらされる自然環境と人文生態の破壊、ならびにこれらすべてから引き起こされる伝統文化への衝撃が、各国における生態博物館の建設者たちが選択した共通の背景である。しかし、フランスにおいて最初に創建され、その後も欧米、アジア、日本に至るまで実験的に建設された各国の生態博物館ともっとも異なる点は、貴州省は社会発展が相対的に遅れており、条件的にもっとも困難である地域を全国に先駆けて中国生態博物館建設の実験地として選択

したということである。先進国は、「すでに現代化され人びとの生活が豊かな」村や町、旧工業区や、都市のなかの歴史街区を生態博物館の建設地を選んでいいる。しかし、中国の貴州省の生態博物館建設地は、民族の個性が明確で、情緒や習俗、民族伝統技芸と地域の自然環境が協和し保存されていることを基本条件としている。中国の民族伝統文化保護の主な対象と分布地域は、このような「浄土」(聖域)である辺縁の山岳地域や村落、社会と経済の発展が欠けている地区が選ばれ、それ以外はあり得ない。先進国の生態博物館建設は、十分な経済基盤のもと、最高の科学技術が誇る媒体と手法、広がり、容量、形式を最大限に快速化することで、「稍縦即逝」、少し放置するとすぐに消え去るような一切の過去と現在の情報を打ち込んでいる。中国の生態博物館は、国情から「因地制宜」(土地の事情に合わせて適切な方法をとる)という考え方を必要としており、経済面で助けられないという制約条件に向きあっており、性急にことを進めるとかえって目的を遂げられない。先進国の生態博物館建設は、地域の人びとがすでに「回帰」を自覚し、良好な文化レベルのもと、積極的に参加するなかで行われているが、我が国の生態博物館の提唱者や建設者たちが直面しているのは、当該地域の人びとに対して新たな意識、観念と先進文化を導入し、参加の動員をおこなうことである。なぜならわが国の建設者たちが向き合っているのは、衣食を満足させるために貧困と闘い努力している人びとであるからである。このような4点の重要な違いを中国の生態博物館の特殊性ととらえ、「文化機構」は同じでも、課せられた職責と使命は異なるのだと考える。つまり、経済の発展、文化の普及、自然生態の保護、居住環境の改善、新たな故郷の建設、伝統民族文化の保護と伝承は、すべて並行されなければならない。このような文化事業に対して、それは重く困難であるかに見える。しかし、まさにそれゆえに中国生態博物館の建設は、偉大な事業と呼ぶにふさわしいのである。

2002年、広西政府は区都、南寧市において長年にわたり練り上げてきた広西民族博物館の建設計画を開始した。これは規模が面積30000㎡以上に達する現代的な博物館で、将来、広西各民族の伝統文化を収蔵、保護、研究、伝承、展示する専門の大型博物館となる予定である。しかし、すでに直面している外来文化の衝撃と衝突について、広大な民族村落の伝統文化保護に根ざして国外や貴州省でおこなってきた生態博物館の実践と成功は、現実的に実行可能なもう1つの道筋を提示している。すなわち生態博物館の建設である。2004年、広西政府は6年間の思考と準備のすえ、6項の原則のもと、広西の特色をもった生態博物館建設の道のりを模索的に進み始めた。

2.1 専門的な指導を首尾一貫して行う

民族学、考古学、博物館学、歴史学、地方史学などの専門家で「広西生態博物館建設課題チーム」を組織し、特定のテーマで広西生態博物館建設の専門の業務と関連する学科の実行可能性の研究をおこない、プロジェクトが始動した後も最後までこれらの業務

指導を担当する。専門家の団体が終始、指導に当たりながら実施することで、今後実施してゆく生態博物館建設プロジェクトを保証する。こうした仕組みはもちろん、政府の管轄する部門が決定した科学的方策であり、プロジェクト実施場所の人員の専門レベルが一時的に不適合な状況にあった場合、補足作用がたいへん大きい。

2.2 試行地区プロジェクトの選択の基点の把握と各級の共通認識の達成

生態博物館の定義である基本原則を遵守し、民族の代表性を強調し、特性が明らかで、一定の歴史の積み重ねと歴史文化の遺物があり、現存する自然と文化生態の保護が良好であるなど、構成するところが「鮮やかで生き生きとした文化整体」であるのが、試行地区プロジェクト選択の基本の必要条件である。プロジェクト開始前期には、試行地区プロジェクトが置かれる市、県、郷、村の4つの政府、組織とともにプロジェクト建設の意義、目標、場所の選択、管理構造と投資組織などの問題において、共通認識を形成するとともに、実行の可能性を保証し、広範な一致をもってプロジェクトの実施に保証を提供した。

2.3 学習型の実験

生態博物館はここ40年来、世界の博物館体系のなかに突然現れた「新しい勢力」であり、理論が整備される途上であるだけでなく、実践活動においても呼称が統一されておらず、モデルも多様である。そのため、実際の作業にさらに必要となるのは、明晰な思想指導で根本を把握し、決意を捨てないという点である。2003年、広西政府は「十百千の人材に関する重点プロジェクト」による人材育成基金によって、広西ではじめて生態博物館の建設を迎えようとしていた南丹県の「広西生態博物館建設の思考の筋道とモデル検討のための高級研討班」設立を援助し、50名以上の地方政府の官員と、50数名の文化遺産保護機構の人員に対して、専門の訓練養成をおこなった。中国で著名な博物館学の理論家・蘇東海氏など国家クラスの専門家も、欣然として遠路はるばる訪れ、研究員たちに講義をおこない、みなど討論し、試行地区プロジェクト所在地において現実に作業を遂行する者にとっての理論と実践のうえでの疑問と問題に答えた。これにより、広西民族生態博物館の建設は、豊富な実践経験と理論的な指導のもとに発足することとなった。貴州省の「生態博物館プロジェクトの実施チーム」もまた、彼らの6年にわたる豊富な実践経験をもたらした。これは新たな事業の試みであることから、その後のプロジェクト実施においても我われは終始、各種形式の不断の「学習」と討論を強調したのである。

2.4 村民に生態博物館の主としての意識を強化させる

生態博物館の特徴は、当該地域の人びとの参与であり、これは生態博物館が成功する

かどうかを押し量る基準の1つでもある。我われは各級政府、文化行政の主管部門と当該地域の人びとが生態博物館建設における関係を正確に処理するよう強調した。今後、長期にわたる作業の行程においては、地域住民の参与の組織にさらなる注意を払い、地域住民に働きかけて、能動的に参与し、最終的に生態博物館の主人となってゆくことなくしては、生態博物館が効果的に地域内の民族文化を保護、伝承する目的と任務は実現しえないということを十分に認識させたのである。

2.5 中国政府による「保護を主体とし、救済を第一とする：合理的な利用と管理の強化」という文物工作の方針を生態博物館建設にも適用する

生態博物館の建設は、自然・人文資源の保護と伝承の必要性に基づいており、このため生態博物館建設の遠大な目標は未来である。中国式の理想的な生態博物館の建設は、その主人である人びとの生活を変え、地域経済を発展させ、さらにすばらしい故郷を建設することの始まりである。元来、地域にあるすべての有形無形の「文化要素のうち特殊な価値と意義を持った」資源の保護とはすなわち、このプロジェクトの目標の実現と永続的な発展の前提となる保証である。このため、生態博物館の門を開き四方から賓客を迎え入れる前に、保護の意識を固く樹立し、その意識が現地の住民一人ひとりのものに根を下すことが非常に重要である。

2.6 生態博物館の建設と広西民族博物館の関係方式を政府が実施する民族の伝統文化とその他の文化遺産の保護、研究、伝承、展示工作の任務をになう連合体とする

広西政府は、行政的な措置により、自治区全域に分布する各民族生態博物館と広西民族博物館の間に、長期的で安定した相互の活動と伸展の関係を構築してきた。広西民族博物館研究工作点の形式をもって、各生態博物館を、広西民族博物館が各民族に対して行ってきた長期の追跡による調査研究、文化遺物の収集と研究成果利用の拡張における基地とした。現代の科学技術の手法を運用することで、両者の間に情報ネットワークを確立し、各生態博物館には広西民族博物館というさらに広いプラットフォームの助けを借りさせ、外部世界との関係を伸展させ、地域と時空の制約を受けずに観衆を拡げるようにする。行政のコントロール方式をもって、両者の間に全方位的な資源共有のプラットフォームをつくりあげ、両者の優れた部分を相互に補うようにさせて、資源価値と利用率を高める。「連合体」の作用は、各生態博物館の建設初期において、その健康な成長にとりわけ重要なものである。

2003年の下半期から2005年の5月にかけて、実地観察と実行可能な研究の完成後、広西政府は少数民族が集住する百色市靖西県旧州のチワン族、河池市南丹県里湖（郷）の白褲ヤオ、柳州市三江侗族自治県の苗江トン族の3カ所の村落を、広西民族生態博物館

の試行地区プロジェクトとして選出した。その2年後、「広西南丹里湖白褲ヤオ生態博物館」、「広西三江トン族生態博物館」、および「広西靖西旧州チワン族生態博物館」が基礎的な建設を完成させて（生態博物館建設の）作業を発展させた。しかし、まさに2年以上の探求的な実践を行った後、我われはむしろ強烈にこれらの作業が真に意義ある始まりであると思いついた——これは、とりわけ中国においては、生態博物館と伝統的な博物館との最大の違いでもあるが、伝統的な博物館はすべて始まりに困難がともなうが、生態博物館の困難はすなわち開館後にある。我われは実践において、いかなる1つの原本も存在しないというのが文化概念の事業であり、その内容と外延はこのように複雑で広範であり、関連する社会問題は数多くあり、一地域、一範囲内の村落の人びとの生活の変貌、社会発展とこれほど緊密に結びついているのだということを、深く思い知らされた。そしてまた、住民の参加が必要な文化事業の進行過程において、観念、行為、利益の上でこれほど多くの衝突に直面し、そうした衝突を正確に導き、処理することに困難がともなわないケースなど絶対にあり得ないということをも知った。しかし、意義もまたこの点にあるのであり、この事業の探求は根気と強い意志が求められる過程であった。

3 広西民族生態博物館建設の「1+10プロジェクト」

3カ所の試行地区プロジェクトの経歴は、広西式の生態博物館建設が研究討議をおこない完璧にすべき多くの問題を、依然として抱えていることを物語っている。しかし、これは1つの事業が発展する過程での正常な現象であり、民族生態博物館が民族文化の保護と伝承のうえですでに作用を発揮してきたという事実を改変することはできない。広西の各級政府は、民族生態博物館建設の歩みを確固たるものとし、さらなる総括と分析の基礎をつくりあげた。そのうえで、広西政府は2005年、今まさに建設している広西民族博物館と、将来、全自治区で次々と建設する予定である10カ所の民族生態博物館を結びつけて「連合体」を作り出し、広西全域で政府が実施している民族の文化遺産の保護、研究、伝承、展示の任務について政策決定を共に担うこととした。また、「広西生態博物館建設課題チーム」が現代プロジェクト学の方法によって編成した『広西民族生態博物館建設の「1+10プロジェクト」の建議書』を採択し、地域、民族および影響、輻射、効果と利益、研究課題などの方面から総合的に企画し、この先3年以内に桂中、桂西、桂北、および桂東南、桂東などの地域にさらに7カ所の民族生態博物館を建設することとした。すなわち、桂東賀州市の蓮塘鎮客家圍屋生態博物館、桂中融水ミャオ族自治県のミャオ族生態博物館、桂北靈川県靈田郷の長崗嶺商道古村生態博物館、桂南東興（市）の京族三島生態博物館、桂北龍勝（各族自治県）の龍脊チワン族生態博物館、桂西那坡（県）の達文黒衣チワン族生態博物館、桂中金秀ヤオ族自治県のヤオ族生態博物館で

あり、3カ所の試行地区プロジェクトと合わせて「1+10プロジェクト」のうちの「10」となり、広西民族博物館の工作点と研究基地としての作用を発揮する。また、広西民族博物館は「1+10プロジェクト」概念のうちの「1」であり、「龍の頭」、あるいは「1+10」の総合的なプラットフォームとしての作用を発揮する。設立するそれぞれの民族生態博物館は、選ばれた地域において一定の文化保護区を画定するほか、保護区内外の適当な位置において、適度な規模で、風貌や景観が文化保護区と調和しており、村民が利用・活動しやすい展示センターを建設する。展示センターは現代の展示技術を反映させた当該地域の歴史概況と民族文化をテーマとした展示をおこなうほかに、記録を整理するための作業室や、小型のマルチメディア会議室、短期逗留して研究する学者にとって便利な客室をそなえている。広西民族博物館は、それぞれの民族生態博物館が撮影、録音、保存、放映したものを集約する機能を持った高度な設備を配備し、それぞれの生態博物館が長期にわたる文化の記録、展示、ネットワークへのリンク、学術研究を行えるようにしている。10カ所の民族生態博物館は、すべて広西民族博物館の長期の作業と民族文化研究の基地として、広西民族博物館に対して収藏品と研究成果を不断に提供し、広西民族博物館の館内所蔵品と展示内容を豊富にする。また、ネットワーク技術を通して、これらと広西民族博物館の間に資源や研究成果、展示宣伝を共有するための遠距離のプラットフォームを作り上げ、事業のうえでの連合総体を形成し、持続的な発展につなげてゆく。

3.1 広西南丹県里湖の白褲ヤオ生態博物館

2003年12月3日、広西、中国ではじめてのヤオ族生態博物館——広西南丹里湖白褲ヤオ生態博物館の展示センターが、南丹県里湖郷懷里村で定礎式を行った。歴史、伝統と自然環境などの要因から、懷里村の白褲ヤオは現在のところ極めて独特で完全、かつ豊富な伝統文化を保存、継承してきており、そこに含まれる染織文化、儀礼文化、制度文化、銅鼓文化、喪葬文化、建築文化は、いずれも一般とは異なったものである。ある意味からすると、この地区の白褲ヤオ文化は広西民族文化のなかでも、閉鎖的で辺鄙な自然地理環境のもとにおかれ、独立して緩慢に発展してきた少数民族の文化の特徴を体現している。しかし、こうした事例は広西では珍しくなく、相対的に辺鄙な環境においてのみ、少数民族の文化はグローバル化と現代化の衝撃や影響を比較的少なく受けるにとどまり、古く原始的な民族文化を保存することが可能となったのである。このことともなっていて生じているのは、当該地域の経済建設の相対的な遅れと、人びとの生活水準の相対的な低下という問題である。こうした環境のもと、民族文化は相対的にいえば脆弱になりがちである。このような条件と背景において民族生態博物館を建設し、後進的な地域において民族文化の保護と伝承を探究し、当該地域の経済と社会の協調的な発展を促すことには、深遠な実践意義がある。生態博物館は展示センターと、懷里村の蛮将、

化図、化橋の3カ所の自然村を現状保護した地点の2つの部分から構成されている。展示センターは三畝の敷地を有し、建物の総面積は900㎡、総投資額は180万円に達し、2004年11月に正式に落成し、対外的に公開された。2005年6月初めには、貴陽の生態博物館国際会議に参加した生態博物館学の創始者ユグ・ド・ヴァリーヌ氏をふくむ20数名の国内外の専門家や学者が特別に南丹に参観に訪れた。彼らは白褲ヤオ生態博物館を高く評価すると同時に、白褲ヤオ文化の未来の発展に対して、強い関心を示した。現在、中国民族博物館はすでに、南丹里湖白褲ヤオ生態博物館を研究工作地点とすることを取り決めている。

3.2 三江県トン族生態博物館

2004年の年末、中国の湖南、貴州、広西のトン族文化保護研究会が三江（トン族自治県）で行われることとなり、広西文化庁はすでに落成し公開して数年が経っていた三江トン族博物館を、重点的に十全なものとし、博物館の展示を改装（『三江トン族文化展』を公開した）するための資金を投入し、県城（県政府所在地）にある三江トン族博物館を三江トン族生態博物館の展示センターと資料収集センターとし、同時に「館村結合」、「館村互動」の方式を採用し、三江県内を流れる苗江の15kmの流域範囲において、高定、独洞、座龍、岜団などの村落を生態博物館の保護範囲に入れた。保護範囲内には、13の風雨橋、26の鼓楼がある。この範囲におけるトン族の伝統的な建築文化は重厚で、錦織文化は優雅で洗練されている。「月也」などの年中行事の情緒は、純朴かつ濃厚で、「款」などの制度文化は希少なものである。三江トン族は中国南部のトン族文化圏の範囲に居住し、中国では比較的に生命力が強い民族文化のうちの1つである。しかし、観光業の発展が比較的早期に進んだことから、交通条件の改善も急速に進んでおり、くわえてトン族の人々は外来文化に対して開放的で受容的な心理状態にある。この地域に対する外来文化の影響は突出しており、文化の融合と変容はすでにゆっくりと生じてきている。三江トン族生態博物館の建設は、観光業の発展を背景に、民族文化の保護と伝承の発展を導くための典型的な実践である。三江トン族生態博物館の建設は、当該地域の実情に合わせて、すでにある設備と資源を利用し、展示センターと保護範囲の異なる部分を結合させるモデルを採用し、領域の広さを保護し、管理モデルを全く新たなもの（政府、專業機構と村民が共同とするもの）にした。「三江モデル」は、目下の中国生態博物館建設における特有の類型として、国内外の専門家の高い評価を得ている。

3.3 百色市靖西県の旧州チワン族生態博物館

チワン族は広西の主体民族で、代表性をそなえ、チワン族の歴史と文化を十分に表現したチワン族生態博物館の建設は、広西政府が広西生態博物館体系を建設した際の重点である。靖西県旧州街は、刺繡、錦織、土司の遺跡、民家建築、山歌芸術、壮劇、木彫、

年中行事などのチワン族の民族文化遺産が豊富、かつ完璧であることから、チワン族文化の典型、代表の1つとされてきた。かつ、旧州のチワン族は歴史上、つねに各種の外來文化を受け入れて蓄え自らのものとする特徴を持ち続けてきた。チワン族文化の変遷を研究するための1つの典型地点である。また、当該地域の自然環境は優美で、交通も便利であり、南丹白褲ヤオ、および三江トン族の状況とは完全に異なる選定地点である。旧州チワン族生態博物館の展示センターは2畝の敷地があり、建物の総面積は700㎡、2004年3月に定礎式を行い、2005年8月に落成した。靖西はチワン族人口がとくに集中する地域で、チワン族文化は奥深く、観光業の重点としての旧州街では、初歩段階の観光市場がすでに形成されており、当地のチワン族の人びとは、チワン族文化の伝承に対する高い自覚を持っている。観光業の発展と同時に、すでに消失した伝統文化の回復をめざす動きも少しずつ起こっており、現代化の衝撃のもとにおけるチワン族人民の高度な文化自覚性を表している。旧州チワン族生態博物館の建設は、間違いなく構造上、このような自覚性を高め強化し、文化の保護が完全になる方向へ向かって発展するだろう。

3.4 桂北靈川県靈田郷の長崗嶺村漢族生態博物館

漢族は、広西の人口総数の約5分の3を占めている。考古学の発見では、つとに春秋戦国時代前後に中原文化が古代広西地域との交流を始め、この後、中原民族が続々と嶺南に移住し、今日のような漢族と当地の少数民族が融合し発展する盛んな状況となった。広西桂北地区は、漢族の数千年の歴史発展過程において、中原文化をもたらしたと同時に、当地の少数民族の文化の精髓を吸収し、中原漢族の伝統文化とは別の独特の文化を創出し、現在まで継承してきた。靈川県靈田郷長崗嶺の古城堡は、もとは瑤山嶺と呼ばれ、莫、陳、劉の三姓が明朝初期に移住してきて、村がつくられてすでに600年以上の歴史がある。「湘桂古商道」（湖南と広西をつなぐ古い商業の道）上の鍵となる地点に位置にするため、経済は繁栄し、歴史上、「小南京」という称号をもっている。ここでは、漢族古建築の保存が基本的に整っており、科挙文化が厚く、中原漢族文化の遺物も豊富であり、桂北漢族文化の典型的代表である。古民家内で保存状態が良好な格扇（隔扇、部屋の仕切り板）、神棚、案卓（供物台）、古い扁額、古い椅子、古いベッド、古い衣装箱、文机、書棚、花轎（花嫁の輿）などは、模様の彫刻が精巧で美しく明晰でさまざまな様式がある。長崗嶺の古城堡は明清時代に人材を輩出し、不完全な統計によれば、正五品1人、従五品1人、正六品2人、六品軍功を授かった者が3人、八品軍功を授かった者が3人いる。長崗嶺村の周囲には今も、明清時代以降、各時代に石を彫ってつくった豪華な70カ所以上の大規模な古い墓が残されている。いずれも逸品揃いで、多種多様である。住民は現在も、伝統的な農業生産の方式を保っており、各種の伝統生産工具、生活用具、および民俗文物がすべて取り揃っている。長崗嶺村は自然と人文、科学研究の考察と伝統の研究が一体化し、文化遺産保護と観光業発展の高い価値をそなえている。当

地の住民は、生態博物館の建設、民族文化の保存、民族精神の発揚に対して、積極的な認識と情熱を持っている。この地に漢族生態博物館を建設し、漢族（中原）文化と広西少数民族文化の融合、変容の研究を展開することで、地域的な人類学、考古学、歴史学、民族学、文化学などの標本研究の作用が備わる。

3.5 桂北龍勝県の龍脊チワン族生態博物館

龍勝県の龍脊棚田は、中国内外でも著名な景勝地である。一年の四季において、龍脊棚田はそれぞれ特徴のある美しい風景で多くの観光客をひきつけている。龍脊棚田は元代に造られ始め、清代に完成した。現在まで650年の歴史がある。風景区の面積は66km²で、「世界一の棚田」と称賛されている。龍脊の主な住民はチワン族で、ここのチワン族は北部チワン族の典型であり、独特の服飾、独自の風情を有し、古風かつ素朴な民族歌舞と優美なチワン族山歌、銅鼓舞、師公舞、打扁担舞（天秤棒を打つ舞）は見る人の耳目を一新するほどである。また、伝統的な高床式建築も特徴的である。この地に観光業を發展させ、また当地のチワン族のもとで過去にすでに消失してしまった一部の民俗と伝統工芸を次第に回復させ、国内外の観光客のまなごしのなかで伝承してゆくことには意義がある。龍脊で観光業が始められてから10数年が経ち、すでに初歩段階の観光市場が形成されている。この地にチワン族生態博物館を建設することで、観光地の生態博物館が民族文化を保護・伝承し、消失してしまった民族の文化要素を再び回復し、観光地区の人文内容を強化してゆくことを探求する。また、当地の観光業發展を文化支援につなげ、同時に、チワン族の民族文化が現代化の衝撃のなかで迎えた回復と変遷について深く学術的な研究を行ってゆくなど、その意義は多方面にわたっている。

3.6 桂東賀州市蓮塘鎮の客家圍屋生態博物館

「客家」は中国に人口8000万人以上が住んでいる。客家人は西晋から宋元年間にかけて歴史上、続々と広西に移住し、当地の文化と結合し、独自の特色ある客家文化を形成してきた。その内容は豊富である。客家圍屋は客家文化の重要な構成要素であり、賀州市の蓮塘鎮には独特の建築構造の特色をそなえ、保存も完璧な3カ所の客家圍屋がある。圍屋は当地および近隣の広東省のそれが著名である。その中でも20畝以上の敷地があり、清の道光年間に建てられた仁冲村の客家圍屋は、現在のところ中国でももっとも完璧に保存され、かつ最大規模であり、歴史が最も古い建築の1つとなっている。その内部は下堂を中心とし、中と外が対称な四層に分かれ、大小の天井を有し、四方八方に通じている。全体の建築平面は四角形で、高い壁で外界と隔たり、家屋、広間、母屋、部屋、中庭の配置は入り組んでおり趣がある。北京の故宮の建築の特徴と、江南の建築の趣もあり、回廊、軒、防風板、梁や柱に彫られた龍や描かれた鳳凰は、華麗で堂々としている。防御システムが完備され、展望台の周囲には銃眼がつくられ、合理的で、守るに易

く攻めるに難い。古代客家人の英知をよく表しており、「江南の紫禁城」と呼ばれ、典型的な客家建築芸術の結晶である。客家囲屋は一族が集住し、安全防衛、防風耐震の機能に優れ、冬は暖かく夏は涼しいだけでなく、豊かな文化内容をそなえており、古く独特な客家建築、精緻に彫刻された百獣の図案、古風で素朴かつ雅やかな明清時代の家具、100年の移り変わりを経た農家の仕事場、情熱的で奔放な歌舞、独特の食文化、感動的な歴史物語はいずれも客家の文化的特徴である。蓮塘鎮の客家囲屋生態博物館は、広西における客家文化の変容過程の研究と人文の展示に対して、生きた客家文化に関する百科全書のうち、広西の巻を見る機会となる。

3.7 桂西那坡県達文の黒衣チワン生態博物館

黒衣チワンはチワン族の支系の1つで、自称は「敏」（または布壮）であり、人口総数は5万人以上で、主に広西の西南部那坡県に集居している。黒衣チワンは黒を美とし、黒色の衣服を着用することで支系のシンボルとしている。その服飾は、黒衣チワンの物質文化の重要な構成部分であり、黒衣チワンの社会経済生活、およびその変化を表し、黒衣チワン文化の内容を表象、再現する作用を発揮している。2000年、南寧国際民歌芸術祭において、黒衣チワンの歌声は国内外の人びとの黒衣チワンに対する強い関心を集め、ある一時期、黒衣チワンに関する人類学、民族学、歴史学、芸術学などの学科研究の成果がこれまでになく豊かになった。関連分野の専門家は、黒衣チワンは今日までチワン族の特色をもっとも完全、かつ明確に保持してきたもっとも古い族群の1つであり、チワン族の伝統文化の生きた化石であるとみなしている。那坡県龍合郷共合村達文屯では、黒衣チワンが千年来の生産生活方式を守っている。大石山区の奥地に位置し、情報から比較的隔てられているため、当地の黒衣チワン住民はその古い民族文化を継承・踏襲してきた。たとえば、服飾文化、銀飾文化、山歌文化、行事文化、喪葬文化、高床式建築文化、族内婚制度、男性が農業労働し女性が機織りをするという自然経済文化などであり、黒衣チワン研究の資源庫となっている。また、達文屯に黒衣チワン生態博物館を建設することに対して、当地の村民は、切実な待望と全力の支援を示している——建設が最終段階に入った達文屯黒衣チワン生態博物館は、広西の10カ所の生態博物館のなかでも、地域住民の参与の度合いがもっとも高い場所の1つである。

那坡の黒衣チワン生態博物館と龍勝の龍脊チワン族生態博物館が、2008年12月を前に相次いで基本的な建設を終わらせたことを受けて、すでに落成していた靖西旧州生態博物館、広西の南、北、西に分布する3カ所のチワン族生態博物館を加え、広西におけるチワン族文化保護区域とチワン族文化研究基地が体系的に整った。

3.8 融水ミャオ族自治県の安太ミャオ族生態博物館

ミャオ族の人口は中国で約900万人を数え、主な分布は中国西南地区の貴州、湖南、雲

南、四川、広西などの地域となっている。広西の少数民族は「壮瑶苗侗（チワン・ヤオ・ミャオ・トン）」と並べられる。180万人を数えるミャオ族は、広西でも人口が多く、民族の特色が明確な少数民族の1つである。広西融水県内の「大苗山」はその原生態的自然環境と、濃厚な民族情緒、壮観な棚田の風景で四方に名を馳せており、広西のミャオ族は主にこの地域に集住している。ミャオ族の歴史、文化遺物は極めて重厚で豊富であり、ミャオ族文化、風俗および工芸を表す蘆笙坡会、百鳥衣（襪の多いスカート）、闘馬、「埋岩」（地域の社会秩序を維持する制度）、吊脚楼（高床式建物）、「坐妹」（不落夫家婚）、油茶（具入りの茶）、酸魚（ナレズシ）などの民族文化は煌びやかで美しく多彩である様を表象している。近現代中国の少数民族を題材とした文学芸術、秀逸な映像作品のなかで、ミャオ族を題材とした作品はとりわけ傑出し広く鑑賞されている。元宝山、摩天嶺、貝江は、神秘的で遠く美麗で荘厳な自然風景の代表である。安太ミャオ族生態博物館は、広西で第二の高峰である元宝山のもと、民族情緒と秀麗な自然風景が一体となった下桑、元宝、培秀など3カ所のミャオ族村落を選んでつくられた。それ以来、融水ミャオ族に関連する人類学、民族学、歴史学、芸術学などの学科研究が盛んになっている。安太ミャオ族生態博物館の建設は、ミャオ族の伝統文化の保護と研究に対して、さらに生き生きとした標本としての作用を発揮するだけでなく、ミャオ族の人のびとが自民族文化の発揚に基づいて、さらに自信をもって未来の創造をおこなってゆくよう促している。

3.9 桂南東興市のキン族三島生態博物館

キン族は広西に特有の少数民族で、人口は合わせて2万人近くを数える。東興市北部湾の万尾、巫頭、山心（「キン族三島」と呼ぶ）一帯に分布しており、広西の少数民族のなかでも唯一、漁業を生業とする民族である。キン族は、もとはベトナム塗山一帯に居住していたが、明清時代に続々と広西に移住し、現在までに500年近い歴史がある。キン族は越境民族であり、ベトナムではベト族と呼び、ベトナムの主体民族である。キン族の言語はベトナム語と同じで、風俗もベト族とほとんど変わらない。「唱哈節」はキン族の民間でもっとも盛大な伝統行事である。キン族はまた我が国の少数民族のなかで平均収入が最も高い民族である。彼らは経済発展と同時に、自分たちの民族文化（たとえば行事文化、服飾文化、一弦琴文化、結婚恋愛文化、漁労文化、高床式建築文化）を保存してきた。また、キン族とベトナムは近く、北部湾のベト族もまた頻りに往来をしている。これによりキン族文化は民族文化と国境文化、海洋文化などの特徴を兼ね備えている。しかし、他の地域と同じで、キン族文化もまた現代化とグローバル化の峻厳な挑戦に直面しており、その豊富な特色をもつ文化もまた少しずつ失われている。キン族文化の保護と伝承は目下、切迫した任務であるといえる。そのため、キン族生態博物館の建設は、さらに良い状態でキン族文化を収集、研究、展示し、国内のキン族資料研究セン

ターを設立する。この場を利用して越境民族の文化変容を研究し、中国とベトナムの民族文化研究の合作を推し進め、中国とアセアン各国の文化交流を活発化させる。幅広い発展の見通しがあるばかりでなく、さらに深遠な国際的意義をも備えているといえる。現在、東興キン族三島生態博物館は中国のキン族集住地域にすでに根を下している——東興市北部湾の「キン族三島」(万尾、巫頭、山心の三カ所の村落)において、建設が始まっている。

3.10 桂中金秀ヤオ族自治県のヤオ族生態博物館

金秀ヤオ族自治県は、広西中部のやや東に位置する大瑤山を主体とした山脈にあり、最高海拔は1979m、広西東北、東南の7つの県、および4つの市と接している。中国ではじめてのヤオ族自治県で、人口総数はおよそ15万人、ヤオ、チワン、漢などの民族が集住し、そのうちのヤオ族は人口の40パーセントを占め、全国でもヤオ族の支系が最も多い県である。大瑤山の奥地に集住する茶山ヤオ、盤ヤオ、花藍ヤオ、山子ヤオ、坳ヤオといったヤオ族の5つの支系は、中国のヤオ族共同体の範疇に属するものの、言語、服飾、社会生産、生活習俗などの方面では多くの独自性をもっている。たとえば、古老悠久の歴史文化、豊富で多彩な風俗情緒、煌びやかで色とりどりの服飾、質素で自然な黄泥鼓舞、神秘的ではかり知れない瑶医・瑶薬、スリリングで刺激的な儀礼「度戒」における秘技などが知られている。この県は地理的には、南亜熱帯と中亜熱帯の交わる地点に位置し、県内には海拔が1500m以上の山々が24もあり、連なる山々は起伏し延々と続いている。広東の丹霞山のように赤色の岩壁を特徴とした地形が主で、風景は柔和にして、造形は天が成したものである。広西第五の高峰、聖堂山は空気が新鮮で気候も心地よく、一年の平均気温は17℃で、夏でも平均気温が23℃と観光と避暑に理想的な景勝地である。1930年代からすでに、「人の世の桃源郷・仙人の国」とたたえられていた。

広西は中国においてヤオ族人口がもっとも集中した地域であるため、「ヤオ族の大本营」とも称される。大きな山に隔てられた居住環境はやや閉鎖的であるため、ヤオ族の民族文化はこれまで良好に保たれてきた。また、東南アジアやアメリカのヤオ族とも深い歴史淵源がある。それゆえ、大瑤山は「ヤオ族研究センター」としての良好な条件をそなえている。かつて、中国人民代表大会の副委員長であり、著名な民族学者であった費孝通氏は、1930年代に金秀を訪れ、ヤオ族の社会歴史状況を調査した。多くの金秀ヤオ族研究に関連する専門書を書き残しただけでなく、金秀がヤオ族の文化生態を良好に保存していることから、金秀に対して「世界でヤオ族を研究するなら中国で、中国でヤオ族を研究するなら金秀で」という評価を与えた。金秀ヤオ族博物館は広西でも比較的早期に建設された民族県域博物館の1つである。十数年の間、県内のヤオ族文化生態の保護のために、著しい成果を残すと同時に、国内外の観光客がヤオ族を理解するための重要な場所となっている。我われは、金秀の実情に結び付け、金秀ヤオ族生態博物館の

建設に「三江モデル」を利用し、県城（県政府所在地）のヤオ族博物館を主な拠点としながら、これをヤオ族の資料集成、研究センター、静態的展示センターとして整備する。費孝通氏がかつて調査を行った六巷郷門頭村（花藍ヤオ）、古陳村（坳ヤオ）、金秀鎮六段村（茶山ヤオ）などの地域を生態保護範囲に画定し、それにより、金秀ヤオ族生態博物館の新たな保護区域および体制を形成する。構造上から「世界でヤオ族を研究するなら中国で、中国でヤオ族を研究するなら金秀で」という状況を実現し、半世紀以来のヤオ族社会の歴史、文化の伝承と変化の研究に対して、世界共通のプラットフォームを提供する。

4 評価と問題

伝統的な博物館は、収蔵品の保護と展示を別の場所で行っている。収蔵品は、従来置かれていた環境から完全に隔離されてしまう。伝統的な博物館は、収蔵品の情報を観客に最大限に展示することができないだけでなく、無形文化遺産を収蔵品として取り扱うことができない。少数民族の伝統文化の収蔵・保護と研究・展示における弊害は、とりわけ明確に表れている。「広西民族生態博物館1+10プロジェクト」は、収蔵品を元来の場所で保護・展示するだけでなく、それ以外の場所でも保護・展示し、有形文化遺産の保護・展示に加えて、無形文化遺産の保護、伝承、展示、公演、発展をも手掛けている。民族生態博物館保護区における政治、経済、文化などの発展・変化の全過程も記録しており、立体的で記憶に残る展示により、収蔵品の情報を最大限に示すという課題を克服した。また、収蔵品の「魚は水を離れられない」という点も考慮し、かつて伝統的な博物館が無形文化遺産と有形文化遺産を同等に扱うことができなかった問題も解決することができた。生態博物館の理念は、中国貴州省、雲南省、内モンゴル自治区、広西などの省や自治区がここ10年の間に導き入れた実験と探究、創造活動を通して、中国における経済発達が遅れた地域の伝統、民族文化の保護と伝承に対する実用性を実証するに至った。

「広西民族生態博物館建設1+10プロジェクト」は、中国にすでにある生態博物館の経験と教訓を総括することを画策している。建設が待たれる民族生態博物館の専門化の持続的発展と、文化機構の機能の永久保存、さまざまな面を引き受け利用するプラットフォームの拡張と伸展、予測不可能な非理想的局面の発生、および文化遺産保護の多数のルートと多数の形式の問題に対して冷静な思考と態度で接し、これら問題に先んじて独特で創造性のある防止策と対応策を作り出す。異なる国の状況や文化の違い、先人が実践経験し啓示してきたものを学習研究する態度を重視し、中国民族生態博物館の実践に対して客観的に認識、対応してゆく中で、保護区の住民は参与させられる状況から自覚的に参与する状況へ、さらには自覚的参与から民が主体となって管理をおこなうまでに至

る長期的な過程を経験する。三級（県・区・中央）政府の指導とさまざまな学問の専門家がチームとなり事前介入する方式により、中国生態博物館の実践における「広西」のモデルとその道筋を新たに創り出した（専門家が称するには「中国民族生態博物館の第二世代モデル」である）。それは、国際生態博物館の理念の指導のもと、生態博物館の専門化を強調し、伝統的な博物館が持っていた基本的機能を堅持しつつ、現代の「生態」保護と展示理念の有効的な結合をもって、文化遺産の保護と伝承（教育）が効果的に実行されることを保証している。実践による経験と教訓を理論的に総括して高め、計画を立て、政府が巨視的にコントロールする。ある系列にねらいを置いた規則の制定を基準とし、それを秩序ある、健全で科学性をそなえたものとする。中心となるプロジェクトとそれを取り巻く周辺プロジェクトの目的を集約し、連盟式の安定した関係をつくりあげ、各種の能力と資源を共用し、利益が付随するその他の社会責任をも進んで己の務めとし、全力で所在地の社会と経済の発展を推し進め、深く村民の歓迎と参与を受けとめ、これをさらに実践性と社会性、持続可能性をともなったものとしてゆく。すでに完成したプロジェクトは、文化遺産保護という機能の発揮や、当該地域の社会と経済の発展促進という作用において、今後プロジェクト建設が待たれる地域の政府と住民の切実な期待、国内外の専門家や学者たちの高い関心を受けとめ、多くのメディアがこれを広く報道している——このような効果と影響はいずれも予測可能のもので、国際生態博物館の発展史、および中国博物館発展史において自己創造の新たな1ページを書き加えるだけでなく、中国の民族文化遺産保護、歴史街区・歴史名鎮・名村・工業遺産の保護、およびそれらが社会主義の新農村建設において生み出した独特の作用に対して広く模範となりうるだろう。

中国における生態博物館の実践は、さらに2つの成果をあげている——第一に生態博物館は、都市住民が地域において伸展、活性化した博物館文化を享受する状況を創り出ただけでなく、広大な農村地域に住む人びとが居住区域において博物館文化を享受しえなかった歴史に終止符を打った点において重要である。伝統的な博物館は都市文明の象徴で、中国における100余年の発展の歴史において、その存在は農村文化の発展とはいささかの関係もなかった。この改革は、中国の広大な農村地域の遺産保護と公共文化体制の建設に、画期的な影響と変化をもたらすであろう。第二に、少数民族地区における生態博物館の実践は、民族文化生態の保護を出発点としており、このような保護とは、全体の保護、現地の保護、自己の保護、および発展中の保護が互いに結合した系統的なプロジェクトである。民族生態博物館は、専門家や学者が民族文化を研究するための特別基地になると同時に、その保護モデルにおいては副産物が生じている——レベルの異なる観光客が訪れるようになり、文化観光、生態観光、学術観光、民謡収集観光、大衆観光を集めた民族生態博物館による観光業の発展は、少数民族コミュニティの社会、経済、文化の全面的な発展を促進し、コミュニティの人びとの物質的な生活条件を改善

し、彼らの自民族、自コミュニティ特有の文化に対する自尊心と誇りを高めている。我われが目にしてある局面とは、すでに建設された、あるいはこれから民族生態博物館が建設される民族地区と村落において、当該地域の民族同胞たちがこれまでになく文化の権益について意識を高め、自民族の伝統的、民族的文化に対する系統的な観察、保護、伝承、発展をすまいに自覚的に強化しているという状況である。

中国の民族文化、とりわけ少数民族文化の保護と伝承のもう1つの実践方法——生態博物館建設の実践は、主として、中国の各方面の典型性を備えた農村、すなわち文化の保存が比較的良好でありながらも、経済発展が相対的に立ち遅れている民族村落において行われている。こうした状況は、生態博物館保護区の住民が、保護と伝承に対して受動から能動へ、さらに能動から民が主体的に管理するまでに至る過程を、複雑かつ長期的なものとした。いかにして保護区の住民を受動的な参与から能動的な参与に導き、さらには能動的な参与から民が主体の管理にかえてゆくのか。またその持続的な発展をいかにして保証するのかという問題は、中国の民族生態博物館の実践のもう1つの難点であり、中国における生態博物館事業の成功と失敗の明暗に大に関わってくるだろう。中国式の生態博物館の建設過程において、その持続的な発展に対して政府、専門家、住民の三者が重要な社会の基礎条件を持ちながら、いかに科学的な対応と長期の持続を行ってゆくのか。民族生態博物館の保護区域の発展において、観光業が必然的に新たな文化の衝突を引き起こすとすれば、民族の伝統文化の保護と観光開発の関係をどのように扱ってゆくべきか。また、文化遺産の保護と当該地域住民の現代生活に対する追求をどのように考えてゆくべきか。そして、政府はいかにしてこのようなもう1つの「文化機構」に対する長期的な運営と管理、資金投入、保障などを実施してゆくべきか。これらの問題がある。

これらを使命とすることから、筆者は、宋代の人・蘇洵の「不先審天下之勢，而欲應天下之務，難矣（天下の勢を先んじて調べなければ、天下の務めに応じたいと望んでも難しい）」という言葉は、世界の伝統、民族文化の保護と伝承の使命を背負い、努力する者への指針となると考えている。ある多元文化の世界的な存続は、「因時立政（時によって政を立てる）」という知謀と、進歩向上に努める実践が必要である。